

# G .H .ミードの心理学（上）

山 下 祐 介

## 目 次

はじめに

### 第 1 節 社会的行動主義の立場

- 1 . 社会的行動主義をめぐる問題
- 2 . 中期ミードの方法論
- 3 . 社会的行動主義の立場

### 第 2 節 意識の発生論

- 1 . 動物から人間へ —— 意識発生の条件( 1 )
- 2 . 「意味の意識」論 —— 意識発生の条件( 2 )
- 3 . 社会の先在 —— 意識発生の条件( 3 )
- 4 . 他者の態度をとることと有声身振り —— 意識発生の条件( 4 )

( 以上、本号 )

### 第 3 節 自我意識論

- 1 . 自我意識発生のプロセス( 1 ) —— 論理的过程
- 2 . 自我意識発生のプロセス( 2 ) —— 子供の成長から
- 3 . 人間社会・コミュニケーション・普遍性
- 4 . “ I ” と “ me ” —— 知能的行為としての自我
- 5 . 普遍化のプロセス・自我と情動

はじめに

前稿( 山下祐介, 1996 )で述べたように、G .H .ミードの理論の中心領域は心理学及び哲学にある。そして、彼の哲学的議論の根底には、常に、念入りに構築された彼独自の心理学理論が存在する。逆に言えば、ミードの心理学は、哲学的探求の基礎づけという大きな目的を持って展開されており、そしてそのために、「意識」や「精神」、あるいはまた「思考」や「知識」の心理学的説明に

関心が向けられたのである。ミードの理論を本当の意味で理解するためには、その理論の根底を支えるところの彼の心理学を、その心理学自身の文脈の中で十分な形で吟味しておく必要がある。

しかしながら、ミード研究はこれまで、心理学ではほとんど行われず、社会学や哲学でのみ行われてきた（三隅二不二，1991）。とくに社会学での研究が盛んであった。ミード研究者はその多くが社会学者であり、さもなくば哲学者であった。その結果、ミードの理論は、その基礎たる心理学理論への十分な心理学的解釈がなされないまま、社会学あるいは哲学の中で利用され、しかもその一方で曖昧だとか、不十分だとかいった不当な批判もなされてきたのである（Kolb(1944)など）。

以下本稿では、ミードの心理学理論の再構成を試みる。ここでは彼の心理学理論をシステムチックに構成された、統一的な理論として再構成していく。その際とくに、彼の心理学理論が、意識なるものを説明するための、哲学的に方向付けられた理論として展開されていることに注意したい。まずは、彼の心理学の方法論的立場である社会的行動主義の立場について議論を整理することからはじめよう。

## 第1節 社会的行動主義の立場

### 1. 社会的行動主義をめぐる問題

ミードの方法論は、一般に「社会的行動主義(Social Behaviorism)」として知られている。この社会的行動主義に関する議論には枚挙に暇がないが、ここではミード理論の解釈をめぐるしばしば対立している社会学的立場、シンボリック相互作用論と「社会行動主義」の議論をあげておこう。まずシンボリック相互作用論の方では、例えば船津衛(1976)は、社会的行動主義を次のように解釈している。彼は、ワトソン流の行動主義心理学とミードの社会的行動主義を対置させて次のようにいう。

「人間行動の外的・空間的分析によって、人間を消極的で受け身的な存在としてしか考えない自然科学的立場[ワトソンなど]に対し、ミードは、人間行為を、その内的・時間的な深まりと広がりにおいて究明し、積極的で主体的な人間像を明らかにする方法の必要性を説いたのである。それが、かれ固有の社会行動主義を提唱させるベースとなり、かれが終始一貫して追求した人間把握の科学的方法の中核をなすものとなっているのである。」(船津衛，1976:p.103)

しかし船津の議論では、ワトソンとの違いを強調するばかりで、ミードがわざわざ「行動主義」という語を選んだ意図が明らかとはなっていない。科学的に「人間の主体性」を追求する方法論的立場とはいかなるものかについては、十分な説明がなされていないと思われるのである。

他方、「社会行動主義」の立場は、ワトソンとの方法論的同一性を認めるところから始める。ここでは、この立場の代表としてL.S.コットレル(Cottrell, 1980)をとりあげよう。彼はミード理論の

主眼点は「相互浸透的相互行為( interpenetrative interaction )」にあり、これがミードの社会的行動主義の中心概念であるとする。相互浸透的相互行為とは、「あらゆる所与の社会的相互行為の中で、参加者がお互いの一部となっている( Cottrell, 1980:p.52 ) ようなものである。要するに、一個人の行動ではなく、二人以上の社会行動を扱うところに、ワトソンとは異なるミードの社会的行動主義の理論的特徴があるというわけである( cf.Lewis, 1976:p.349 )。そしてさらに、シンボリック相互作用論を含めこれまでのミード研究は、ミード理論の経験的研究を怠ってきたと批判し、ミードの理論の経験的検証を求めている( Cottrell, 1980:p.60 )。

シンボリック相互作用論が、ワトソンとミードの違いを強調し、フロイト心理学や現象学との比較は行いながら、ワトソンの行動主義心理学とミードとの関係についてはつとめて見ないようにしてきたのに対し、「社会行動主義」は、逆にミードとワトソンの同一性を強調し、いわばワトソン理論の発展型としてミードの理論を捉え、これを実験心理学的に経験的に検証しようとしている、と言ってよいであろう。

いずれにしてもこれらの社会学的立場においては、社会的行動主義は、社会学の方法論として捉えられているようである。しかしながら、前稿に述べたとおり、ミードの研究歴は第一に心理学者のそれである。そして社会的行動主義は、心理学的研究のための心理学的な方法論的立場である。しかもそれは社会学者がという意味での社会心理学の立場でもなく、第一に哲学的探求のための基礎を——そしてその先には社会改革のための理想や方法の科学的基礎づけの作業が見据えられている——与えるべく、意識の心理学的説明を供給するためにとられた方法論的立場である。

では、社会的行動主義( Social Behaviorism )の立場とはどのようなものであったか。このことを明らかにするために、まず確認しておかねばならないのは、この立場がミードの思想発展においていつ頃から主張されたのか、その時期的位置づけである。じつのところ、ミードははじめから一貫して社会的行動主義の立場を唱えていた訳ではない。前稿にて、ミードの思想発展を前期・中期・後期に三区分しておいた。ミードが行動主義を名乗るのは、この三区分のうちの後期のみである。

ところで、ミードの心理学的研究のもっとも脂の乗った時期は、中期の1909年から1913年までの一連の論文( Mead, 1909;1910b;1910c;1912;1913 )においてである。この一連の論文が完結するまでは、ミードの関心はそのほとんどが心理学に向けられており、その完成と同時に多方面に関心を広げ、特に哲学の分野で多くの議論を行っていくこととなる。つまり、ミード心理学の中心的論理が完成されたこの時期、ミードは行動主義をまだ名乗っていないのである。ミードが行動主義者を名乗るのは後期に入ってからであり、公刊論文としては、後期の主要論文のひとつ「有意味シンボルに関する行動主義的説明( 1922 )」からである。ここでミードは、中期の心理学理論を簡単に紹介した後、「行動主義の観点から」( 1922:p.161 )さらに発展させるというやり方で議論を行っている。

我々はここに、中期から後期への「行動主義的」展開を読みとることができる。しかも、この後期の展開が、中期の批判・撤回によってではなく、中期の継承・発展のなかで行われていることを考えれば、ミードの社会的行動主義の理解のためには中期ミードの心理学を考察する必要があるこ

とが分かる。そこで社会的行動主義の立場を吟味する前に、まず中期ミードの心理学的立場を確認しておきたい。じつのところ、これら中期の論文の題名のひとつにその立場は端的にあらわれている。「生理学的心理学の相補物 (counterpart) としての社会心理学」(1909) がそれである<sup>1)</sup>。



## 2. 中期ミードの方法論

中期ミードの心理学は、1909年に始まり1913年の「社会的自我」に終わる一連の心理学的問題に関する論文に代表される。テーマは、初期からの一貫してのテーマである「意識はいかにして生ずるのか」という意識の発生論であり、「社会的自我」論文後半の倫理学によって完成する。中期ミードの心理学の主要論文は次の五つである。

- (1) 「生理学的心理学の相補物としての社会心理学」(1909)
- (2) 「心理学はどのような社会的対象を前提としなければならないか？」(1910b)
- (3) 「社会的意識と意味の意識」(1910c)
- (4) 「社会的意識のメカニズム」(1912)
- (5) 「社会的自我」(1913)

順々に読んで行くとわかるのだが、これら五つの論文はいわゆる「連続もの」であり、前の論文で行った問題提起を次の論文が受けて議論を展開し、さらにそこから次の論文への新しい問題提起を行うという形になっている。この節では彼の中期の心理学的立場を表わすものとして(1)および(2)を取り上げることとしよう<sup>2)</sup>。



ミードは、1909年の論文「生理学的心理学の相補物としての社会心理学」で自らの立場をはっきりと表明している。

この論文は、当時の社会心理学を概観することから始めている。Ross、McDougall、Royce、Baldwin、James、Angell、Cooley と、当時の著名な社会心理学者を次々と紹介した後、彼らを次のように一括して批判する。「今や、どの立場もとることができないのはあきらかである。我々は、次のようなことを仮定する訳にはいかないのである。すなわち、自我 (self) は、人間の意識の生産物であると同時に前提条件でもあるということ、反省作用 (reflection) は、社会的意識を通じて生起し、かつまた、社会的交渉は表出すべき観念や意味を人が持っているが故に生じたのだということである。」(1909:p.403) 要するにこれまでの社会心理学では、精神・自我と社会との関係がトートロジーになっていたというのである。すなわち、一方で自我を持った個人が社会を形成し、他方またそのような個人によって形成される社会が個人の自我を形成することになっている。このままではいつまでたっても意識の発生を説明することはできない、というわけである。

ミードは、このトートロジーから脱するために、社会関係を意識発生的前提条件とすることを主張する。「はじめに社会ありき」というわけである。こうしてふたたび、McDougall、Royce、Wundt を引用しながら、次のような形で心理学における社会心理学の重要性が主張される。

「もしこれらの立場が正しいのなら、次のことはあきらかである。我々は社会集団を、その対象や

相互関係、諸自我 (selves) とともに、反省作用や自我意識の前提条件として提示し分析することに関して、社会科学に十分に頼らねばならない。これは、我々の物理的意識の前提条件である物理的複合体を提示し分析するのに関して、生理学的心理学に頼るのと同じくらいそうなのである。いいかえれば、社会心理学は、生理学的心理学の相補物 (counterpart) とならねばならないのである。」 (1909:p.408)

ミードはこうして、意識の発生を説明する要件として意識に対する社会の先在を主張し、社会心理学の重要性を強調する。ただし、ここで注意すべき点がいくつかある。まず第一に、ミードが社会心理学の必要性を主張するのは、「意識の発生を論じるため」であること、つまり、ミードの関心はとりあえず意識や自我の発生論にあるのであって、この問題を取り扱うために社会心理学の必要性を説いていることである。第二に彼が、生理学的心理学と社会心理学との関係を相補物 (counterpart) として位置づけ、決して生理学的心理学が不要だといっているのではないことにも注意が必要である。ミードはしばしば社会心理学者として捉えられる。おそらくこれは正しい。しかし、ミードの関心が必ずしも「社会」にのみ集中しているわけではないことに注意しなければならない。前稿にも示したとおり、ミードはもともと生理学的心理学を学ぶためにハーバード大学に入学したのであった。また、かのドイツ留学の目的も、ヴント流の生理学的心理学を学ぶためだったのである。ミードが公刊論文や講義録の中で、ヴントやジェームスの生理学的心理学を少なからず引用していること、またさらにこのヴントやジェームズに限らず、個人的にも親しかったデュエーイの機能主義心理学をもミードが深く評価し、多くのところで基本的文献としてあげていることはよく知られている<sup>3)</sup>。これらのことを考えるなら、ミードが生理学的心理学の弱点を補い、より適切な心理学理論を打ち立てるために、生理学的心理学に社会心理学を持ち込もうとしたのだ、ということが分かるであろう。つまりミードは心理学者の立場から、生理学的心理学を前提とした上で、生理学的心理学のみでは解決されえない問題——意識・自我の発生論——を解決するために、社会心理学を心理学のプログラムにのせることを主張しているのである<sup>4)</sup>。

こうして次の1910年の論文「心理学はどのような社会的対象を前提にしなければならないか？」では、1909年のものよりもより詳しく、今後の研究方針が明らかにされる。

「リアルな心理学的分析のなかでは、我々は意識の状態や流れのプロセスを、これらの諸自我 (selves) の正常な存在や機能のもとで条件づけねばならない。これは、我々の心理学が前提にしている物理的メカニズムの正常な構造や機能のもとで、意識の出現や機能を条件づけるのと同じである。」 (1910b:176)<sup>5)</sup>

すなわち、一方で生理学的心理学によって、意識の物理的条件を確定し、意識の構造や機能を解明する。意識が有機体の内面で起こる現象である以上、これは当然の手続きである。他方、社会心

理学によって、意識の社会的条件をも見出し、この方面からも意識の出現の条件と機能とを解明していかなばならない。社会 — 他者の存在 — もまた意識発生の前提条件だからである。そうして最終的に、生理学的心理学と社会心理学との両者の相補的關係の中で、全体としての意識の流れや過程を分析することができるだろうというのである。

### 3. 社会的行動主義の立場

ミードの心理学の論文は、1913年の「社会的自我」以降しばらく途絶えるが、1922年の「有意味シンボルの行動主義的説明」、および1925年の「自我の発生と社会的コントロール」、1926年の「パースペクティブの客観的実在性」の三つの論文の中で心理学の議論が再開されることとなる。1913年以降、公刊論文の数そのものが減少していて、1922年論文を皮切りに再び公刊論文の数が増えていくことからみても、1922年論文や1925年論文は後期ミードの心理学的基盤となるべき論文であったと見てよい。そして彼がこれらの中で行うのは、中期心理学の「行動主義的観点から」(1922:p.161)のさらなる展開なのである。

ところで、彼の有名な講義録はすべてこの時期のものである。中でも有名な『精神・自我・社会』(1934)は、後期心理学の全体像を知るには格好の手がかりである。この本には奇しくも「社会的行動主義の立場から」という副題が付されているが、この副題がたとえ編集者の手によるものだとしても、この本の中にある次のような記述は興味深い。

「心理学は意識を取り扱うのではなく、個人の経験を、それを進行させている条件との関係において取り扱うものである。そのような条件が社会的なものである場合に、それは社会心理学となる。経験へのアプローチが行為を通じて行われるところで、それは行動主義的となる。」(MSS:pp.40-1= 訳 p.45)

つまり、社会的行動主義は、行動主義心理学と社会心理学とのふたつのアプローチを統合した立場なのである。ここで、先ほど見た中期の立場と、この後期の立場とを比較すれば、中期において生理学的心理学であったものが、後期においては行動主義心理学に代わっているのが分かるであろう。1913年から1922年のあいだに、彼がどのような理由でこのように立場を変えたのか、この時期のアメリカ心理学におけるミードの位置がよくわからないのではっきりとした経緯を示すことはできないが、その論理的理由として次の二、三点を指摘することは可能であろう。

まず第一の理由として挙げられるのは、「リサーチ科学」としての行動主義の主張である。三隅一成(1975)は、ミードの方法論的立場を、ミード自身の言葉である「リサーチ科学 (Research Science)」に集約している。ミードがこの言葉を使うのは、後期の講義録、『19世紀の思想動向』(1936)においてであるが、そこではルネサンスから現代までの思想史を、ドグマ的なものから科学的で合理的なものへという流れの中で捉え、その中で現代科学が「リサーチ科学」として成立し

てくる過程を描いている。ミードはリサーチ科学を次のように定義している。

「リサーチ科学者は、これまで法則として認められていたものに対して例外をしめすような特殊な問題からはじめる。そのような例外が与えられると、彼はその問題を解決に導くような仮説を提示しようとする。彼の仕事はこうして、問題に始まり、その解決に終わる。そしてその解決とは、例外それ自身が説明されること、つまりその問題が提示していた矛盾を解消しうる、新しい説明が与えられるということの意味しているのである。」(MT:p.264)

以上のような科学論は、別稿(山下祐介, 1997)で見ておいたようにミードの心理学にもとづいた知識論の結論であるが、このような主張は、初期の論文の中でも既に行われており(cf.1900)、このような形での科学に対する姿勢が、かなり早い段階からミードの中に存在していたことがわかる。ミードが行動主義心理学を、ヴント的な構成主義心理学以上に、よりリサーチ科学に近いものとして捉えていたことは想像に難くない。そして第二の理由は、この構成主義心理学の方法論の問題を解決するものとしての行動主義という側面である。

ヴント流の生理学的心理学は、その理論的立場から構成主義心理学と呼ばれ、またその方法論から内観主義心理学とも呼ばれる。その理論は、簡単にいえば次のようなものである。「ヴントにとって、意識の基本的な状態ないし心の要素を形成しているものは、赤(赤という経験)のような基本的経験であった。ヴントは自然科学者がその主対象である物質界を分割したのと同じように、心ないし意識をそのもっとも要素的な成分にまで分析ないし分割することを求めた。」(Schultz, 1981=訳 p.66)この研究方法として、「内観(introspection)」が行われた。内観とは、自己観察のことであり、要するに意識経験の直接的観察である。これには特殊な訓練が必要とされ、この訓練を受けた観察者が、一定の感覚刺激を受けたときに意識に現われるものを観察し報告するといった形で実験は行われる。例えば、「赤」という音声刺激を受けて意識に現われるものを、観察者は報告するのである。

ミードによれば、このような構成主義心理学は——そして構成主義心理学に限らず生理学的心理学全般にとっていえることだが——パラレリズム(平行論)の問題を不可避的にかかえているという。彼によれば、生理学的心理学は次のようなパラレリズムを心理学に導入することに成功した。すなわち、一方に心理・意識といった世界を仮定し、それを研究する。他方、物理的世界をも認め、生理学的構造をも研究する。心理や意識が身体の構造と関係がある以上、このパラレリズムはリサーチ科学として当然の手続きである。

しかしミードによれば、構成主義心理学は次のような過ちを犯してしまったという。すなわち、意識界と物質界とをパラレルなものとして認めながらも実質的には分離したままにした、意識界と物質界との相関関係を問題にすることができなかったというのである。構成主義心理学は、意識界と物質界を関係づけるのではなく、むしろ意識界によって物質界を一方向的に説明しようとした、といっ

てよいであろう。例えば、赤色という観念に相当する中枢神経系内の要素があると仮定されたように、である。このままでは意識を説明することはできない。なぜなら、中枢神経系のどこにも赤色に相当する要素は存在しないからである。ミードは、この問題を解決するために、つまり意識界と物理界との相関関係を見いだすために、行動主義が重要だというのである（cf.MSS, p.40= 訳 pp.44-5）。

その方法論改編の舞台は特に観察の方法であった。すなわち構成主義者の行っていた「内観」法の克服である。しかしミードは、客観性のために「内観」を拒否するというよりは、「内観を避ける」ために、行動主義を利用するのだと主張する（ISS:p.106）。そして、「内観」によって意識から身体へとアプローチするのではなく、「行動」という点に着目することで、意識と身体との両方の関係を考察しようとする。そうすることで、「内観」にたよることなく、パラレリズムの問題がよりよい形で解決されるはずだというのである。ミードは、これをパラレリズムの「本質的にプラクティカルな性質」（MSS:p.33= 訳 p.37）であるとしている。

こうして、ミードの行動主義の主張は、構成主義心理学を中心とした生理学的心理学の批判的継承であるといつてよい。では「行動」に着目するとはどのようなことか。これによって、いかにすれば意識にうまくアプローチできるというのであろうか。このことを議論するためには、行動主義の主唱者である J.B.ワトソンの行動主義とミードの行動主義との違いを見ておかねばならない。なぜなら、ワトソンの行動主義は、意識に直接アプローチすることを放棄したところにその特色があり、ワトソン流に行動主義を主張するならば、「行動」に着目して意識を説明するというやり方は論理的にまったく矛盾してくるからである。

ミードのワトソン批判は、次のような引用に代表されよう。

「ワトソンは、客観的に観察できる行動が、科学的な個人心理学及び社会心理学の領域を、完全にそして排他的に構成すると主張している。彼は、『精神』とか『意識』といった考えを誤りとして退け、すべての『メンタルな』現象を条件反射やそれに類似した生理学的メカニズム —— つまり、純粹に行動主義的な用語 —— に還元するのである。」（MSS:p.10= 訳 p.13）

このようなワトソンの行動主義に対し、ミードは次のように主張する。精神や意識を、純粹に行動主義的用語に「還元する」ことは不可能だとしても、行動主義的用語で「説明する」ことは不可能ではない。少なくとも意識や精神の説明を放棄したり、その存在を完全に否定する必要はない、というのである（MSS, p.10= 訳 p.13）

要するに、ミードとワトソンの違いは、問題関心の違いなのである。ミードの関心は意識の発生論にあった。これは初期からのミード心理学の課題である。ワトソンはこれを不可能として切り捨てたが、ミードの関心はまさにここにあった。そしてミードはワトソンが不可能としたこの領域こそ、行動主義によって説明可能となるのだとしたのである。



ではどのようにして行動主義の用語で意識が説明されるのであろうか。ミードは次のように論じている。「…行為の一部は生物体の内側にあり、それはただ後になって表出されるにすぎない。ワトソンはまさにこの部分を見落としているのである。行為の内側にある領域があり、それは外側には現われないが、行為に属するものである。そのような内的な生物体の行動の特質は、我々自身の態度 (attitude) の中に、とくに会話と結び付いた態度の中に現われる。」(MSS:p.6= 訳 pp.8-9) こうしてミードは、意識を行動主義の用語で「説明」するための必要概念として、「行為の内的側面」あるいは「態度 (attitude)」の概念を導入するのである。

この「内的行為」の仮定が、意識の発生論にとっていかなる意味をもつのか。最終的にこのことが明らかにされねばならない。ところが、ミードは後期の著作や講義録のなかで、しかも上の議論が展開される当の舞台である『精神・自我・社会』(1934)の中でさえ、このことに充分に触れていない。

この問題を解く鍵は、中期に展開される「意味の意識」の議論の中にある。「意味の意識」論は、意識発生的前提条件を探る議論の中で展開されるもので、ミード心理学の第一のテーマである意識発生論の中心部を構成するものである。それ故、社会的行動主義に関する議論はとりあえずこのままにして、先にミード心理学の中心たる意識の発生論に入って行きたい。その中で社会的行動主義のより深いもう一つの意味について触れることができるであろう<sup>6)</sup>。



ミードは、初期の論文「倫理学の哲学的基礎」(1908)の中で進化論的観点について触れ、次の

## 第2節 意識の発生論

ように述べている。

「今やある程度まで、環境の進化の概念は、生物体のそれと同じく、我々の生物学では支配的なものとなってきた。環境は、それが有機体の感受性に答える限りでのみ、生物体にとって存在するということが明らかとなった。有機体はこうして自分自身の環境を決定する。それぞれの適応の影響が新しい環境となり、この環境はそれに反応するものとともに変わっていかねばならない。」(1908:p.312)

生物学的進化論は、次のようなことを明らかにした。物理的事物から生じてきた生命有機体は、物理的複合体でありながら、単なる物理的複合体以上の性質をもつ。生命有機体は環境に適応し、そうすることで自分自身の有機的構造を変える。生物体の適応のプロセスが生物体自身の構造を進化させるのである。上のミードの主張は、この生物学的進化論に次のようなことを付け加える。すなわち、生物体の適応は、生物体の有機的構造だけでなく、生物体の環境をも進化させるのだというのである。

この論文では、ミードは、この議論の後一足飛びに話を倫理学へと進めてしまうのだが、この主張は明らかに中期心理学の重要な前提的視点を提供するものである。ミードの心理学的関心は、人間の意識や精神、思考や知識といったものを説明することであった。こうしたものを説明するために、ミードは意識の発生という進化論的観点からアプローチしていくのである。ミードは、人間的意識を、人間以前の動物のもっていた環境が進化したものと捉える。つまり人間の環境を、動物的環境でありながら動物的環境でない性質をもつものとして捉えるのである。ミードは、人間以前の動物から人間的意識が生じてきた条件を列挙するという形でこの意識の発生を説明している。以下、ミードの示す条件を、大きく四つにわけて見ていくことにしよう。

### 1. 動物から人間へ —— 意識発生の条件(1)

人間的意識 —— ミードはこれを特に反省的意識と呼ぶ —— は、動物の中からいかに生ずるのか。ミード心理学の第一の課題は、この問題を解決することにある。この問いに答えるためには、まず動物的環境の中にある意識的なものの萌芽を見いださねばならない。つまり、反省的意識以前の、非反省的な意識から議論していかなければならない。

ここでは、ミードのそのような議論の端緒を示すものとして、ミード最初期の学会報告要旨「生理学的観点からの情動」(1895)を紹介しておきたい。この報告要旨は、ミードが残した心理学理論のテキストとしては最も初期に当たるもので、ミード理論の出発点を示すのに好都合であろう<sup>7)</sup>。

ここではミードは、デュエーの情動論を生理学的心理学の立場から解釈しなおし、それを土台として、意識の生理学的説明への足掛かりをつかもうとしている。

彼は次のように論理だてている。生理学的にいえば、情動(emotion)とよばれるものの背後には「血管動脈神経系(vaso-motor system)」の喚起が存在している。しかし、この喚起は、直接的本能的行為と、本能的でないより知的な行為との間では、プロセス中での位置づけが全く違っている。まず、本能的行為においては、この喚起は行為とともに現われる。「...血管動脈神経系(vaso-motor system)は、これらの単純な本能的行為の中では、感覚神経系(sansa-motor system)との自動的な結合の中にある。行為は血液の流れの増大の前に始まっていなければならない。」(1895:p.163)要するに本能的行為では、刺激に対して行為が直接引き起こされ、情動(血液の流れの増大)も行為と同時に引き起こされている。情動は行為とともに現われるのである。他方、このような本能的行為に対し、「行為への準備」が行われているような場合 —— つまり行為が本能的直接的に行われず、刺激に対していったん停止しているような場合 —— には、この血液の流れの増大は行為が実際に行われる前に生じている。刺激に対して行為は直接現われず、情動のみが先に生じる。情動は実際の行為の前に現われるのである。

ミードはこうして、本能的状態と意識的状态とを、情動という観点からうまく対比させていく。本能的状態では、情動は行為とともに生じている。情動が生じたときには、行為は既に終わっているか、終わっていても既に始まっていて、コントロールしえないものとなっている。他方、意



識的狀態においては、行為は自動的には行われずとりあえず抑制されている。行為が実際に行われる前に情動が起こっている。そして、ミードは次のように述べている。この意識的行為における情動の目的とは、「特殊な反作用へと導く〔諸神経作用の〕共同が完成される前に、有機体にその行為の評価を与えることである。」(1895:p.164)つまり、情動が実際の行為の前に現われることによって、意識的行為においては、情動がこれから行おうとする行為の「評価」の先取りとして機能しているというのである。

以上の議論は、彼の最晩期の遺稿「現在の哲学」(1932)第四章でも多少言葉を変えて、簡潔にまとめられている。時代は前後するが、初期中期のこの辺りの議論を非常に簡潔にまとめたものなので、以下、しばらくこれを見ておきたい。彼は、ここでは、意識の最も低い形態としてのフィーリング(feeling)から、心理学的考察を始めている。

動物は、その動物にとって良いものあるいは悪いものに対して反応する。例えば食べ物や敵に対してである。そして、良いものは受け入れられ、これに伴って喜び(pleasure)が生じる。他方、悪いものは拒否され、同じように失望(displeasure)が生じる。これらは先に見たように、生理学的には血管動脈神経系における血液の流れの増大や抑制であり、本能的な行為の場合にも起こっているものである。それ故、このような喜び pleasure・失望 displeasure のフィーリングは、下等な動物にも見いだされるのである。

しかしながら、だからといって、動物自身がこのフィーリングを意識しているかどうかは別問題である。なぜなら、これらのフィーリングを当の動物自身が意識しているためには、自分自身の有機体の状態——つまり体内での血管動脈神経系における血液の流れの増大や抑制——を、動物自身が対象化していなければならないからである。そしてこれが可能となるのは、動物が、自分自身の体内の状態に反応できたときだけである。つまり、喜び(pleasure)・失望(displeasure)といったものが意識されるためには、これらの体内の状態に対してその動物自身が反応していなければならない。他方、動物的な本能的行為においては、刺激に対して反応と情動とが同時に起こっている。刺激に対する実際の反応と、体内の状態とが切り離されておらず、体内の状態にのみ注意が向けられうるようなことはありえない。

ミードはここから、意識発生のための条件を提示する。彼はざっと書き流しているが、これらの条件は次の四点にまとめることができる。(PP:pp.69-71)

(1) 生活(life)プロセスの存在。「ライフとは、その中で個人が自らの活動によって、自分自身においても、かつまたより後の世代においてもこのプロセスを維持せんとする傾向を持っているようなものであり、また有機体のうちに進行しているものを越えて周囲世界へと拡張し、個人の環境世界としてのその活動範囲内に見いだされる限りの、多くの世界を定義しているものである」(PP:p.69)とされているが、要するに、単なる物理的物体とは異なるものとしての、生命維持へと向かう生物体のプロセス——環境への適応と、その適応による環境の変化に対する再適応の無限のプロセス——の存在である。

(2) 第二に、「[ ライフの ] 目的論的プロセスにある生物体が、全として、自分自身の有機構造の状態に対して、目的的に反作用するということ」( PP:p.69 )が必要となる。言い換えれば、意識が発生するためには、有機体は、自らの体内に起こっていることに対して反応できなければならない。しかも、一つの統一体として、反応できなければならない。

(3)(2)が行われるのは、生物体内の神経メカニズムである。それ故、それを司る中枢神経系が第三の条件となる。

(4)そして第四の条件は、この中枢神経系が可能にする、 経験の内容と、 直接的反応との分離である。生物体は、発達した脳によって、対象に対する直接的本能的反応を遅らせることができる。対象に対し直接反応しているようでは、体内に起こったことが意識に上るようなことはありえない。刺激に対する反応を直接外面化することがなくなったときはじめて、刺激に対する自分の体内の状態に対して反応することが可能となるのである。それゆえ、意識発生のためには、この 刺激に対して起こる体内の状態が 直接的な外的な反応と区別されていなければならない。

以上四点を食べ物を例にとって考えてみよう。食べ物に関する意識が生じるためには、その食べ物を食べて生命活動を営む生物体が存在していなければならない(条件1)。生物体は食べ物を見付け、喜びを感じる(もっとも満腹のときは感じないであろう)。生物体はその食べ物を意識しているためには、この自らの喜び(血液の流れの増大)に対して反応できるようでなければならない(条件2)。これを可能にするのは生物体の中枢神経系である(条件3)。最後に、生物体が食べ物に対して直接反応している場合(つまり食べ物を見てすぐに食べてしまうような場合)には意識は発生しえない。直接的反応は外面化されずに遅らされていなければならない(条件4)。こうして、食べ物を見つけた生物体が、その食べ物を食べるという直接的反応を遅らせて、食べ物に対する自分自身の体内の状態(喜び)に対して反応している時のみ、彼はその喜びを意識しているのだと言うことができるのである。

このようにして、生物体自身の体内の状態が、生物体自身にとっての対象となり、自らの環境の一部となる限りにおいて、生物体は意識的となる。「意識的生物体とは、自らのライフプロセスの諸側面をその環境の部分とすることができるような生物体である。」( PP:p.70 )精神(mind)と呼ばれているものは、このような形での動物的環境の —— 内側への —— 拡張として生じてくるものなのである。

## 2. 「意味の意識」論 —— 意識発生の条件(2)

「現在の哲学」では以上の議論の後、すぐに「観念」についての説明に入ってしまう、意識の発生論はこれ以上詳しくは説明されていない。他方、中期ミードは、より詳しく意識発生についての議論を行っている。中期ミードは「意味の意識」という観点からこの問題にアプローチする。次にこの中期の「意味の意識」論を見ていくことにしよう。

中期心理学の中心テーマは、意識の発生論である。ここで取り上げる「意味の意識」論は、第1

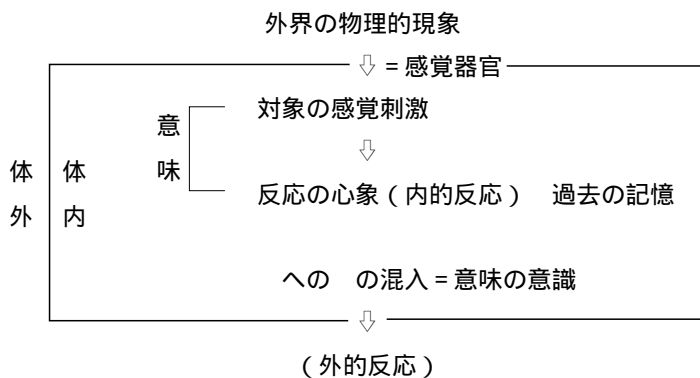
節で見た方法論に関する二つの論文の後、本題の意識の発生論の前半部を構成するもので、1910年の「社会的意識と意味の意識」と1912年の「社会的意識のメカニズム」を中心に展開されているものである。

ミードはまず、客観的に「意味 (meaning)」を定義する。彼によれば、意味は生物体と環境との関係にある。例えば、食べ物の意味は、その生物体がそれを「食べる」ところにある。草は草食獣にとって食物だが、肉食獣にとっては食べ物ではない。従って、意味とは、環境と生物体との関係にある。より正確に言えば、意味は、その対象と、生物体がその対象に対してとる行為との関係にあるのである (1910c:p.401)。これを生物体個体の側からいうと、対象のもたらす刺激とその生物体の反応との関係が意味だ、ということになる。例えば、椅子の意味は椅子のもたらす知覚刺激と、それが導く「座る」という反応との関係にある。

意味はこうして、生物体の内面にさかのぼることなく客観的に存在する。この「意味」を意識すること、すなわち「意味の意識」が成立するためには、感覚刺激とその刺激に対する反応とが、ともにある生物体個体の内部 (特に中枢神経系内) で起こり、しかも両者が生物体の体内で関係づけられていなければならない。つまり、「意味の意識」とは、刺激の感覚に、それが導く内的な反応が混入することであり、それゆえ意識の中には、対象の感覚的な刺激のみならず反応もまた含まれていなければならない、というのである (1910c:p.400)。上の例でいえば、椅子の感覚刺激と「座る」(内的) 反応とが中枢神経系内で結合したとき、かれは椅子の意味を意識したことになる。こうして、中期ミードの言葉を引用すれば、意識にのぼる対象は次のように定義される。「知覚対象 —— 物理的対象 —— とは、直接の刺激の経験と、この対象が導くであろう反応の心象 (imagiry) との結合物である。」(1912:p.401)「反応の心象」は、過去の記憶が導くものであり、それは前節でみた外的行為に対する内的行為 (あるいは態度) であり、また先の動物的状况においては情動にあたるものである。以上の議論をより簡単に図式化すれば、およそ 図1 のような形になるであろう。

対象の感覚刺激と 反応の心象との関係が意味であり、両者の結合 によってはじめて、意味の意識が可能となる。

図1



ヴント的な構成主義心理学に代表されるように、心理学は意識を刺激の領域のみで捉えがちである。しかし、行為（行動）の内的側面を認め、これを意識の要素として加えることで、「行動」という観点から意識は説明されうるとミードは主張するのである。

ここに、後期に行われる行動主義導入のもっとも重要な局面がある。ミードは意識を内的行為（行動）と捉えた。意識＝行為である以上、ミードの心理学は行動主義たらざるをえない。中期に到達していたこの見解からいって、後期ミードが行動主義を名乗るのは当然の成りゆきだったのである。こうしてミードにとって行動主義導入のもっとも重要な意義は、ワトソン流の行動主義が標榜する「客観性」にあったのではない。意識を行為（行動）として扱うこと、ここにあったのである（1925:p.251）。

ミードの社会的行動主義は、こうして生理学的心理学の二重の転換の結果である。ミードが、意識の発生論を論じるために、生理学的心理学に社会心理学を導入したことはすでに述べた。それが中期ミードの特色であった。後期において彼は、この自分の立場を、さらに生理学的心理学との関係でも明白なものとしようとする。そして、意識＝行動という彼の理論構造を端的に表わすものとして行動主義が名乗られることとなるのである<sup>8)</sup>。

### 3．社会の先在 —— 意識発生条件(3)

以上が生理学的心理学の観点から引き出された意識発生条件である。しかし、意識発生条件はこれではまだ不十分である。意識発生のためには、もうひとつ必要不可欠な条件がある。それが社会の先在である。

ミードは、1910c年論文及び1912年論文で「意味の意識」を定義した後、次のように議論を続ける。以上のように、意識には「反応」が含まれる以上、意識の発生には自分自身の反応に「注意」が向けられねばならないということになる。自分自身の反応が自分自身にとっての刺激とならねば、意識の中に「反応」が要素として入って来ることがないからである。こうして、意識発生の生理学的条件から、「自分自身の反応が自分自身にとっての刺激となるような状況」が必要であると考えられるのである。そして、このような条件を満たすのは、社会的な状況に他ならないとミードは主張する。

ミードによれば、刺激と反応との関係が適合的な場合、つまり、ある対象に対して行為が直接的になされう場合、意識は発生しえない。なぜならこの場合、刺激と反応は一連のものとしてあり、区別されることがないからである。つまり、先にみた条件(4)「経験の内容と直接的反応との分離」が満たされず、行為が終わったときにはその行為に関する意識は過ぎ去ってしまっていることになるからである。刺激と反応とがコンフリクトにある状態にのみ意識は発生しうる（1910c:p.403）。例えば、お腹を空かせたある生物体が、食べ物を目の前にする。その食べ物がすぐに手に届き、食べることが可能である場合、生物体は食べるという反応を遅らせる必要はない。食べ物に直接食らいつけばよい。ここには意識が発生する状況はない。他方、例えば、容易に渡りえ

ない川の向こうに食べ物がある場合は状況は異なる。食べ物に対し、生物体は直接食べるという反応を起こしえない。このような対象と反応との関係のコンフリクトにおいてのみ、刺激とそれに対する直接的反応とが分離され、意識発生の状況が成立しうるのである。

しかし、問題は容易には片付かない。この状況からそのまま意識が発生しうるとは言えないからである。なぜなら、川の向こうに食べ物があるという場合、注意は川や川底、川の向こうの様子や食べ物に向けられているだけで、食べ物を食べようとする自分の内的行為には向けられないからである。つまり、物理的对象との関係では、注意は専ら対象に向けられるのみであって、自分自身の反応に向けられることはないのである。ミードの用いた例を使うなら、例えば、天気が悪くなるかどうかといった場合、注意が向けられるのは空の色や空気の具合であって、自分自身の行為ではない(1910c:p.404)。

社会的状況においてのみ、自分の行為に注意が向けられるのだ、とミードは主張する。ここでミードが言う社会的状況とは、同じ種の他の生物体との身振り会話の状況であり、このアイディアは、周知のとおり、彼がドイツで学んだW.ヴントから来ているものである。身振り状況とは、ミードによれば、自らの反応が相手の次の反応の刺激となり、相手の新しい反応が自分の次の反応への刺激となっているようなものである。ミードが好んであげる例は犬のケンカや、フェンシングである。一方の出方が相手の次の出方を変える。状況はめまぐるしく変わっていく。反応は様々であり刺激も様々である。ここではコンフリクトの絶え間ない持続が見られる。そして、自らの反応が相手の次の反応、つまり自分に向けられる次の刺激を決定するが故に、自分自身の反応が次の状況を決める大きな要因となっている。当然、生物体は、状況にうまく適応するために、自分自身の反応にも注意を向けるようになる。こうして社会的状況においてのみ、自分の反応(身振り)に対して注意が向けられるような状況が生じてくるのである(1910c:p.404)。

ミードは、このような社会的状況は、人間以前の動物のライフプロセスの中にも見られるものであるとし、マクドウガルを引用している。例えば、マクドウガルのあげる社会的本能のうち、闘争、生殖、養育、遊び、狩猟といったものは、人間以前の非意識的な動物の中にある社会的状況の例としてあげられるという<sup>9)</sup>。

こうして身振り状況は、自分自身の反応に注意が向けられるための条件であり、意識発生のためのなくてはならない条件である。社会的状況の中で初めて意識は発生しうるのである。それゆえ、物理的对象に関する意識よりも先に、社会的対象に関する社会的意識がまず発生するのである。社会的対象とは次のようなものである。社会的意味とは、「身振り」(刺激)とその身振りに対する「反応」との関係であり(1910b:pp.177-8) 例えば、「座れ！」という言葉の意味は、「座れ！」という身振り(音声刺激)と、座るという実際の反応との関係である。この意味が対象化されるわけであるから、「社会的対象とはこうして身振りである。つまり、[1]他者の中で進行中の社会的行為の最初の指示と、[2]その刺激に対する我々自身の反応の心象である。」(1912:p.403、括弧内は筆者挿入)上の例でいえば、「座れ！」という音声刺激と「座る」(内的)反応とが中枢神経系内で結合したと

き、彼は「座れ！」という、社会的対象としてのこの言葉の意味を意識したことになるのである。このような形で、社会的対象は意識にのぼるのである。

食べ物や椅子、自分自身の身体などの物体に関する物理的意識は、社会的意識が発生した後に現われる。「社会的意識は、物理的意識に先行しなければならない」(1910b:p.180)のである。先に第1節で見たような生理学的心理学に対する社会心理学の方法論的重要性は、このような文脈から説かれていたのである(1909;1910b)。

#### 4. 他者の態度をとることと有声身振り —— 意識発生条件(4)

それでは、ある生物体が自分の身振りの意味を意識してその身振りを使うためには何が必要であろうか。その身振りが(相手に対してだけでなく)自分自身にとっても意味のあるもの——モードはこれを有意味(significance)という言葉で表わす——となるためには、どのようなことが必要であろうか。意識発生最終的な条件として、このことが明らかとされねばならない。生物体は自分の身振りを意識的に行うための条件は何か。この条件が、生物体は意識的に行為する——生物体は意識的存在となる——ための条件となるはずである。

この部分についての中期の議論は非常に不親切で、十分に吟味せぬまま次の有声身振りの話に移ってしまう。それ故、ここでは後期の議論から補足しておこう。

生物体は、自分自身の身振りを有意味なものとして行うための条件とは何か。後期モードは次のように述べている。

「個人が、彼自身に対して、他者の態度を取る限りにおいて、そしてある意味で、彼自身の中に、彼の行動が他の個人の中に呼び起こす行動への傾向を引き起こす限りにおいて、彼は彼自身にその身振りの意味を示したといえる。」(1922:p.161)

生物体は、他者に対して身振りを行うとき、その生物体はその身振りに対して、(自分自身ではなく)他者として内的に反応しえたときのみ、彼はその身振りを有意味に用いたこととなる。「座れ！」という言語シンボルを用いる個人は、「座る」他者の反応を内的にとっている。この他者の態度をとったときのみ、シンボルを意識的に用いたことになるのである。これを図式化すれば 図2 のようになる。身振りが有意味シンボルとなるためには、その身振りを行う当の生物体は、他者の役割(role)をとって他者として反応し、その他者としての反応が、最初の身振りに混入していなければならない。「彼が自分自身であると同じように、他者でもある能力を通じて、シンボルは有意味となる。」(1922:p.161)<sup>10)</sup> こうして、意識発生条件はより鮮明なものとなってくる。つまり、意識が発生するためには、自分自身の反応に対して、他者の立場から反応し、しかも、この二つの反応が経験内で融合していなければならないのである。





## 図2

### 自分の身振り（シンボル）

他者の役割を取って他者として反応

の への混入 = 有意味シンボルの形成

この条件を満たす生理学的・社会的プロセスは何か。最終的にこのことが示されねばならない。そしてそのプロセスが、有声身振りのメカニズムなのである。

有声身振りのメカニズムの重要性は次の二点にある（1912:pp.402-3）。まず第一に、有声身振りは、発声器官によって複雑な表現が可能であり、それゆえ生物体をとる態度を無限に複雑化する。反応も刺激も無限のパターンが可能である。しかしより重要なのは、音声身振りは、他の身振りと違って、自分自身にも他者と同じくらいリアルに語りかけてくるという点である。顔の表情や手振りは自分自身には不完全にしか分からない。これに対し、有声身振りの場合、「我々は、他者が聞くのと同じように、自分自身の有声身振りを聞いている。」（1925:p.271= 訳 p.63）有声身振りによって、生物体は、「他者が自分に対して行為するのと同じように、自分が自分自身に対して行為しようとしているのを発見する」のである（1925:p.271= 訳 p.63）。意識の発生の最終的条件は、自分自身の反応に対して他者として反応し、この反応が最初の自分自身の反応に混入することであった。この混入は、有声身振りのメカニズムによって可能となるのである。こうして有声身振りのメカニズムが加えられて、生物体が意識的人間となる条件をすべて揃えたことになるわけである<sup>11)</sup>。

意識は以上のような条件のもとで発生してきた。列挙するならこうである。(1)ライフプロセスの存在。(2)本能的直接的反応の抑制と、内的行為と外的行為との区別。(3)それを可能にする中枢神経系。(4)社会の先在。(5)他者として反応することと、それを可能にする有声身振りのメカニズム。こうして、すべてが揃ったところで、(6)感覚刺激と他者としての内的反応との結合が可能となり、有意味シンボルが現われることとなる。この有意味シンボルが、反省的意識を形成する。そしてこれが精神(mind)と呼ばれているものである。人間の意識 — 精神 — とはこうして、他者の態度をとることによって、動物的環境が生物体自身の身体の状態にまで拡張されたものなのである。

ミードがこの文脈から次に示さねばならないのは、これらのシンボルの普遍性がどのようにして生じてきたのかという問題である。例えば次のような問題が生じる。ある生物体が、有意味な身振りを行ったとして、その相手の生物体が適切な反応を起こさなければ、最初の身振りは最初の生物体にとっては有意味であるかもしれないが、相手の生物体にとっては有意味ではないことになる。さらにこの状況が続けば、最初の身振りは二度と使われなくなるであろう。有意味シンボルという言葉の意味を十分に充たすためには、このシンボルが自分自身だけでなく他者にも共通の意味をも



っていなければならない。さらにはまた「抽象性」の問題も残る。我々は多くの抽象的なシンボルを持つ。とくに観念 (idea) と呼ばれているものが存在する。これらは、どのようにして説明されるのだろうか。

その答は、中期ミードによっては十分に示されない。それは、後期ミードの「一般化された他者」の概念の導入によってはじめてうまく示されることとなる。他方、この「一般化された他者」概念は、彼の自我意識論と密接に結びついており、それのみでは説明されえないものである。それ故、ここでもまた議論をいったん中断して、次の自我意識の発生論に入っていくことにしよう。普遍性・抽象性の問題は、その議論の中で「一般化された他者」の概念が導入された後に再開したい。

(以下、次号)

### [ 註 ]

- 1) ここでは文脈の関係上、一部を除いて、初期心理学への詳しい言及は避けた。初期心理学の議論はいずれも中期の意識発生論に至るための試金石にすぎないからである。ミードの初期の思想を時系列的に迫った研究としては、H. ヨアス (Joas, 1980=1985) がある。この研究は、初期に限らず中期に至るまで、ミードの思想発展を追った数少ない論文であるが、しかし彼は哲学的議論に執着して、心理学方面での議論を十分に行ってはいない。また、ヨアスの中期心理学の扱いには根本的な誤りが一点ある (次の註を参照)。また初期ミードの代表的論文「心的なものの定義 (1903) については、安川一 (1986) が非常に分かりやすくまた適切に解説している。
- 2) 先にヨアスについてふれたが、彼はこの五つの論文のうち、(2) と (3) の順序を逆にしており、それゆえこれら五つの論文の有機的なつながりを見落としてしまっている。この二つの論文は同じ年の発表 (1910年) であるが、(2) はその前年に学会報告 (1910a) をすませせており、(3) に先駆けて (3) と同じ誌上でその要旨が発表されている。(2) は明らかに (3) の前に位置づけられねばならない。
- 3) この姿勢は初期から後期にいたるまで首尾一貫している。初期の論文「哲学的領域の理論に対する提案」(1900) では、機能主義心理学の中心的論文となったデューイの「心理学における反射弧概念 (1886) の検討から始めている。さらに注目すべきは、後期の講義録『19世紀の思想動向 (1936) の第17章「行動を通してアプローチされる精神 その研究は科学的になされうか?」である。ここではミードは意識の発生論を可能にするためのアプローチの方法として、行動主義を主張するが、ワトソンの行動主義を不十分とした後で、真の行動主義としてジェームズとデューイの心理学を持ち出してくるのである。
- 4) 生理学的心理学のみでは心理学は不十分であるという主張は、ジェームズの『心理学』と一致する。しかし、ジェームズが結局、心理学をあきらめて哲学に移って行く (James, 1892= 訳 (下巻) pp.284-5) のに対して、ミードはこれを社会心理学の導入によって、心理学の分野で解決しようとするのである。
- 5) この論文に先立って発表された、学会報告の要旨の方がよりはっきりとした主張になっているので、あわせて紹介しておこう。「諸自我は、心理学が、生理学的対象 生理学的有機体やその神経系 を前提にするのと同じくらいにはっきりと前提にしなければならない社会的対象である。究極的には、心理学は社会科学からこの対象の定義を受け入れるだろう。このことは、生物科学から生理学的対象の定義を受け入れるのと同じである。社会科学は、自我意識が可能となる社会的状況について言及する。これは、生理学的科学が、意識が可能となる物理的条件に言及するのと同じなのである。(1910a:53)
- 6) ここでさらに、機能主義心理学とミードとの関係を見ておく必要を感じる。というのは、心理学史は一般に、構成主義 機能主義 行動主義という発展を軸として捉えられるからである。しかし、それは明らかにここでの関心をこえる。ミードと機能主義心理学との関係について簡単ふれておくにとどめたい。ミードはW. ジェームズのもとに学んでいたこともあり、さらにデューイとは学問の世界ではもっとも親しい

友人であったこともあり、またさらにはシカゴ大学自身が機能主義心理学の中心地 おもにエンジェルを中心としていた でもあったことから、彼らの提唱する機能主義心理学に対して、常に共感をもっていたことは事実のようである。機能主義心理学の理論的支柱であったデューイの論文「心理学における反射弧」論文(1896)の多くの点が、ミードとの対話からえられたものだといわれていること、またデューイが去った後の心理学のシカゴ学派の屋台骨であるエンジェルが、多くの点でミードと類似した議論をしていることから、ミードがこの機能主義心理学にとって中心的人物であったことはほぼ間違いない。また先の註でも見たとおり、ミードは、機能主義心理学と(ミードのいう意味での)行動主義心理学を区別していない。むしろ機能主義=行動主義とさえしているのである。彼が、機能主義に対するアンチテーゼを多分に含んでいた行動主義を、機能主義心理学と対立するものとしてではなく、むしろ機能主義心理学の純粋な発展形態として捉えていたことがわかる。このことについても様々な憶測が可能だが、それについては今回は十分な議論はできない。また加えて、機能主義心理学とプラグマティズムとの関係が重要であるが、この点についてもここでは議論は差し控える。

- 7) この1年前の1894年の「ラスヴィッツのエネルギー論及び認識論について」も心理学的論文であるが、書評の類いに属するものでミード自身の理論は示されていない。
- 8) ただし、ここでみる限り後期行動主義は中期の単なる継承である。しかし、後期心理学は中期の理論をある点で大きく発展させることとなる。それは「一般化された他者」概念の導入である。この点については、第3節で見ることとなる。
- 9) もっとも、ミードは後に、本能論を「敵対的/友好的」という、より簡単な形にまとめてしまう(1918:p.578)。
- 10) ここでは、ミードがしばしば使う「他者の態度をとる」という表現と「他者の役割(role)をとる」という表現とを、ほぼ同じものとして扱っている。ただし、厳密に言えば、「他者の態度をとる」=「他者の役割をとって他者として内的に反応する」である。しかしミード自身、この二つの表現を厳格に区別して用いてはいない。ところで、ここで注意すべきは、ミードの「役割(role)」という言葉の使い方である。ミードの文脈における「他者の役割をとる」あるいは「他者の態度をとる」という表現は、意識や自我意識の説明の中でのみ用いられる。「役割」は、ミードの文脈では、意識発生を説明するために想定した対面的コミュニケーションの場面の中で使われている。これは現在、社会学で「役割取得」と言う場合に意味しているものとはニュアンスが異なる。ミードの文脈における「役割」は、必ずしも社会学の「役割」概念のように社会システム上の位置を示したものではないからである。もっと素朴な用法である。
- 11) もちろん、おしの場合をミードは無視していない。おしの場合、有声身振りに代わるものが同じ機能を果たすことで、意識発生の条件となっている(1912:p.405)。その代替物はもちろん、第一には手話であろう。

## [ 参考文献 ]

- Cottrell, L.S., Jr. 1980 'George Herbaert Mead, The Legacy of Social Behaviorism', in "Sociological Traditions from Generation to Generation", edited by Robert K.Merton & Matilda White Riley, Ablex Publishing Corporation, pp.45-65.
- Dewey, John 1896 'Reflex Arc Concept in Psychology', Psychological Review, 3:357-370.
- 船津衛 1976 『シンボリック相互作用論』、恒星社厚生閣。
- James, William 1892 "Psychology", Henry Holt. = 1939、今田恵訳『心理学』、岩波文庫。
- Joas, Hans 1980(1985) "G.H.Mead:A Contemporary Re-examination of his Thought", translated by Raymond Meyer, Polity Press.
- Kolb, William L. 1944 'A Critical Evaluation of Mead's "I" and "me" Concepts', Social Forces, 22:291-296.
- Lewis, J.David 1976 'The Classic American Pragmatists As Forerunners to Symbolic Interactionism', Sociological Quarterly, 17:347-359.
- Mead, G.H. 1894 'Herr Lasswitz on Energy and Epistemology', Psychological Review, 1:pp.172-5.

- 1895 ‘ A Theory of Emotions from the Physiological Standpoint ’ ; (Abstract), *Psychological Review*, 2:pp.162-4.
- 1900 ‘ Suggestion Towards a Theory of the Philosophical Disciplines ’ ; *Philosophical Review*, 9:pp.1-17.(= SW:pp.6-24.)
- 1903 ‘ The Definition of the Psychical ’ ; *Decennial Publications of University of Chicago*, First Series, vol.3, University of Chicago Press:pp.77-112.(= SW:pp.25-59.)
- 1908 ‘ The Philosophical Basis of Ethics ’ ; *International Journal of Ethics*, 18:pp.311-23.
- 1909 ‘ Social Psychology as Counterpart to Physiological Psychology ’ ; *Psychological Bulletin*, 6:pp.401-8.
- 1910a ‘ What Social Objects does Psychology Presuppose ’ ; (Abstract), *Psychological Bulletin*, 7:pp.52-3.
- 1910b ‘ What Social Objects Must Psychology Presuppose? ’ ; *Journal of Philosophy*, 7:pp.174-80.
- 1910c ‘ Social Consciousness and the Consciousness of Meaning ’ ; *Psychological Bulletin*, 7:pp.397-405.
- 1912 ‘ The Mechanism of Social Consciousness ’ ; *Journal of Philosophy*, 9:pp.401-6.
- 1913 ‘ The Social Self ’ ; *Journal of Philosophy*, 10:pp.374-80. = 1991 船津衛・徳永直人訳「社会的自我」、『社会的自我』、恒星社厚生閣。
- 1918 ‘ The Psychology of Punitive Justice ’ ; *American Journal of Sociology*, 23:pp.577-602.
- 1922 ‘ A Behavioristic Account of the Significant Symbol ’ ; *Journal of Philosophy*, 19:pp.157-63. = 1991 船津衛・徳永直人訳「意味のあるシンボルについての行動主義的説明」、『社会的自我』、恒星社厚生閣。
- 1925 ‘ The Genesis of the Self and Social Control ’ ; *International Journal of Ethics*, 35:pp.251-77. = 1991 船津衛・徳永直人訳「自我の発生と社会的コントロール」、『社会的自我』、恒星社厚生閣。
- 1926 ‘ The Objective Reality of Perspectives ’ ; in E.S.Brightman(ed.), “ Proceedings of the Sixth International Congress of Philosophy ” ; New York, Longmans, Green and Co.:pp.75-85.(= PP:pp.161-175.)
- 1932(PP) “ The Philosophy of Present ” ; Edited by Arthur E.Murphy, With Prefatory Remarks by John Dewey, Chicago, University of Chicago Press.
- 1934(MSS) “ Mind, Self and Society:From the standpoint of a Social Behaviourist ” ; edited by C.W.Morris, Chicago,University of Chicago Press. = 1973 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳「精神・自我・社会」、青木出版。
- 1936(MT) “ Movement of Thought in the Nineteenth Century ” ; edited by M.H.Moore, Chicago, The University of Chicago press. = 1991 河村望・近藤敏夫監訳『社会学思想史講義:19世紀の思想動向(上・下)』いなほ書房、1994 魚津郁夫・小柳正弘訳『西洋近代思想史 一九世紀の思想の動き(上・下)』、講談社学術文庫。
- 三隅一成 1975 『行動科学と心理学』、産業能率短期大学出版部。
- 三隅二不二 1992 「意味としての行動 ジョージ・ハーバード・ミードの学説と生涯」、奈良大学紀要、第20号、189 - 202頁。
- Schultz, Duane 1981 “ A History of Modern Psychology: 3rd edition ” ; Academic Press. = 1986、村田孝次訳『現代心理学の歴史』、培風館。
- 安川一 1986 「心的なものの定義」:主観性をめぐって G.H.ミード『行為の哲学』に向けて(その1)、『一橋研究』71:83 - 107頁。
- 山下祐介 1996 「G.H.ミードの思想発展 伝記的背景と公刊論文から」、『文経論叢』第31巻第3号、101 - 137頁。
- 1997 「ミードの科学方法論」、船津衛編『G.H.ミードの世界 ミード研究の最前線』、恒星社厚生閣、41 - 63頁。